

津軽三味線と
太鼓の情報誌

Monthly
BACHI-BACHI

2

[グラビア]

●Taiko Road

上田秀一郎

●Tsugaru Road

あんみ通

[NEWS]

キング、コロムビア、ビクター、クラウン共同企画

「日本音楽の巨匠」25タイトル発売!

3

2005.VOL.9

上田秀一郎

UEDA SHUICHIRO

期待の若手奏者・上田秀一郎、和太鼓松村組を離れ、林英哲に弟子入りしたその決意とは

SHUICHIRO

U E D A

ア

アメリカでの仕事を終え、現地で3つの舞台を見て来たんです。ほんまにすごかった」

きりっとした顔だが嬉しそうにほころぶ。

上田秀一郎、28歳B型。昨年、生まれ故郷の神戸市を離れ、林英哲のもとに弟子入りした。現在は、ソロ活動のほか英哲風雲の会のメンバーとして、弟子として、師匠とともに世界中を飛び回る。

英哲のバックで太鼓を打つ彼の視線がいつも気になっていた。ひとつの動作も見のすまいとばかりの食らい付くような目。

「舞台での僕の位置は特等席なんですよ。師匠の動きが一番良く見えるんです。なんであんなきれいな動きができるんかいなどと思って真似してみる。師匠の舞台を一つでもいいからたくさん見たい、もっと勉強したい、そう思って上京しました」

弟子入りは、今までの人生のなかで一番深く悩んで出した答えだった。それは太鼓を始めるきっかけを作ってくれた高校の恩師・松村公彦（現・和太鼓松村組代表）との別れでもあった。

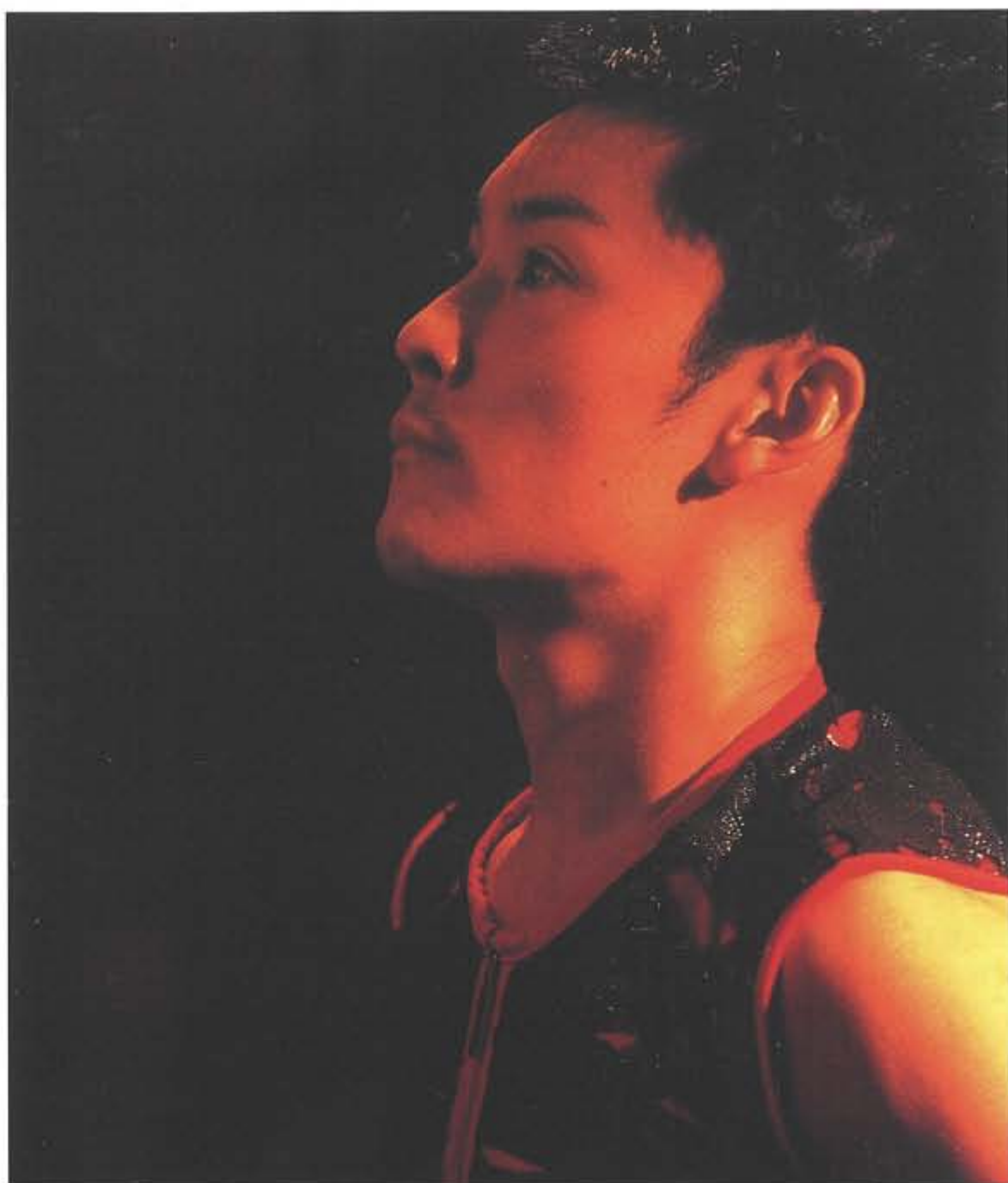
太鼓を始めたのは高校3年生の時、松村に太鼓同好会を作らないかと声をかけられたのがきっかけだ。松村と大学の同期だった時勝矢一路の協力を得て、高校の文化祭で発表。翌年、阪神淡路大震災が起こった。

「学校に行けなくなりました。先生の提案で、太鼓を持って避難所などを回りました。元気が出たと言って下さる皆さんの声に、僕にも人を励ますことができるんやと思って思いました」

その後、時勝矢一路のヨーロッパツアーに4ヵ月間同行。数々の舞台を経験させてもらいながら、楽器の準備、食事当番として、朝から夜中まで働いた。

「きつかった。ツアーから帰ってすぐに松村先生が焼いてくれたぎょうざがほんま美味しかったのを良く覚えています」

太鼓と共に歩んだ道のりは、同時に松村との歩みでもあった。だが、英哲風雲の会に参加し始めてから、上田の心のなかに変化が起きた。



舞台での僕の位置は特等席なんですよ シンプルなんだけど 表現豊かな演奏をしたい

「もっといろんなことを勉強したいという思いがどんどん大きくなってきた。年齢的にも今がギリギリや…」

思いきって口にした決意に松村は反対した。和太鼓松村組として本腰入れようという時だったからだ。

「何度も先生と話し合った結果、理解してくれました。その後、英哲師匠のところへ行き、勉強させて下さいと言ったんです。

師匠は一步踏み出したらなるようになるもんだって言って下さいました」

取材した日は尺八奏者の土井啓輔をゲストに迎えた2度目のライブ。リハーサルでは、客席から見守る林の言葉を、どんどん吸収していく。恵まれた環境に甘んじることなく、ゼロに戻ろうとする姿が印象的だった。

「1人の演奏家として、いろいろな演奏家と一対一で向かい合うことができるようになりたい。たった1つの太鼓でシンプルなんだけど表現豊かな演奏をしたいな」。今の彼にとってそれが第一の目標だ。暗い土の中で、精一杯栄養を吸収しながら春を待つ小さな芽のような、みずみずしい爽やかさと生命力を感じた。

彼の太鼓人生はこれから。聴衆のひとりとして見守りたい。

●プロフィール

1976年、神戸出身。和太鼓松村組の発足メンバーとして活動しながら林英哲主宰「英哲風雲の会」に参加。04年より林英哲に師事しながらソロ活動開始。同年、林の代役でベルギー国立交響楽団と共演、ソリストとしてデビュー。すでに幅広い年齢層にファンを持つ期待の新人。



●「ここはバチではなく、手で打ったほうがいいんじゃない？」リハーサルで、林英哲がアドバイス。

●2005年2月10日、邦楽ジャーナルクラブ「和音」(日暮里)にて、ライブ「黒と赤」。